



保育の専門性を生かした子育て支援

「子どもの最善の利益」をめざして

亀崎美沙子（著）（2018年9月，わかば社）

東洋大学ライフデザイン学部 教授 高山静子

保育士の職務には、子どもに対する保育と、保護者に対する子育て支援の二つがある。本書は、後者の保護者に対する子育て支援について解説した書である。

筆者は、子育て支援研究の第一人者として、様々な研究論文を発表してきた。筆者の関心は、副題にもある「子どもの最善の利益をめざす子育て支援」にある。子どもの利益と保護者の利益はしばしば矛盾する。子どもの保育と保護者の子育て支援を職務とする保育者は、子どものニーズと保護者のニーズの矛盾に葛藤する。

実践は混沌とした営みであり、個性が高く再現性の低い事象である。とくに保育士が行う子育て支援は、問題を自覚した保護者に対して個別に対応する子育て支援よりも、問題を自覚していない保護者に対して、園という日常的な場で行う子育て支援が中心である。問題発生後のケース研究と比較して、園を利用する保護者集団に対する予防育成型の支援の研究は、その成果が回りづらく、研究は困難を伴う。筆者は、この困難な研究課題に対して、保育者へのインタビュー等地道な調査を重ねてきた。本書は、現在までの子育て支援の研究の到達点に基づいて、学生や保育者に子育て支援を分かりやすく解説した書となっている。

本書は「なぜ保育者が子育て支援を行うのか」「保育者の行う子育て支援の独自性は何か」「子育て支援において、どのように子どもの最善の利益を保証するか」の三つの問いで構成される。

この書では、環境構成を活用した子育て支援を詳しく解説しているところが特徴的である。これまで子育て支援では、相談への対応が中心に置かれている解説書が多かった。しかし保育士の子育て支援は、社会福祉士や臨床心理士が行う子育て支援とは異なる。心理の専門的なトレーニングを受けていない保育者が面接相談を受けることは適切とは言い難い。保育士は子どもの保育という職務を担っており、保護者の子育て支援には保育の場の特性や保育者の専門性の活用が求められている。第三章「環境構成を活用した子育て支援」では、この具体例として環境を通じた保護者支援を解説している。筆者は、日本のエキスパートの実践を研究対象とし、実践という現象を構造化し理論化して本書で示すことにより、実践者に新しい視点をもたらし、実践の意味を再認識させることに成功している。日本の実践現場の研究は実践者に取り入れやすく、実践のイノベーションを後押しすると考えられる。

最終章の「『子どもの最善の利益』を保障するための6つの視点」では、子育て支援で葛藤を生じたときの視点を実践者に提供している。

通読して最後に問いが残った。「子どもの最善の利益と、保護者の真のニーズが一致する子育て支援」はどのようなものだろうか。現場に寄り添い、子どもと保護者、保育者のために研究に尽力する筆者に、問いの答えを期待したい。

